

現代日本語における漢字の表意性

吉 村 弓 子

0. はじめに

現代日本語表記には、言語単位の段階ごとに異なった問題がある。文章全体では、縦書きか横書きかということがある。文章や文の段階では、括弧、なかてん、ダッシュ、下線、感嘆符など、符号の用法と、句読点の用法とがある。語の段階では、漢字、平かな、片かな、ローマ字、数字など、文字の適用がある。本稿では、文字の適用について考察し、以下、語表記の意味で表記という。

文字には、2つの段階、すなわち、文字体系と個々の文字がある。本稿は、前者を考察の対象とし、以下、文字体系の意味で文字という。したがって、ここでとりあつかう問題は、ある語を、漢字、平かな、片かな……のいずれで表すかということである。文字体系内での変容、たとえば、「言う」と「云う」、「いう」と「ゆう」、「イウ」と「ユウ」と「ユー」、に関しては、とりあつかわない。

本稿の目的は、現代日本語における、漢字表意性の退行を証明することである。第1節では、現代日本語の表記体系について、その規範意識と現実の使用状況を概観する。第2節では、漢字の表意性を検討する。第3節では、漢字を代行する片かな表記を分析し、考察を加える。最後に第4節で、結論を提出し、今後の課題を考える。

1. 現代日本語の表記体系

1. 1. 文字使用の規範意識

日本人は、表記の専門家でなくとも、日本語の使用者として、文字使用に

ついて何らかの規範意識をもっている。その意識の大半は、漢字かな交り文という語に集約できよう。『国語学大辞典』（1980年）「漢字仮名交り文」の項目には、次のように記述してある。

……第二次世界大戦後は、公文書も口語体漢字平仮名交り文となり、殆どすべての文に統一的に行われるに至って現在に及んでいる。

この記述によれば、「仮名」は「平仮名」を示している。日本人の意識の上でも、片かなは特別な語、例示すると、外国の地名・人名、外国語・外来語、擬声語・擬態語、当用漢字で書けない動・植物名など、を表すときにだけ用いる文字体系であると、位置づけられている。かな、というときに、まず思いおよぶのは平がなである。

文字に対する関心は、主として漢字に注がれており、かなは脇役である。漢字は中国から渡来した文字であり、かなは日本で考案された文字である。それにもかかわらず、漢字が本字、かなは仮の字、というとらえかたが古くからあった。その主たる原因は、次の3点に求められよう。

- (1) 漢字は万葉時代から、かなは平安時代になってから使われた、という使用期間の違い
 - (2) 漢字は実質語に、かなは機能語にあてる、という用法の違い
 - (3) 漢字が政治権力階級や知識階級で用いられた、という価値の違い
- (1)、(2)は今日でも同様である。(3)は、今日では事情が変わり、漢字の読み書きができない人は、ほぼ皆無に等しい。しかし、漢字のもつ威厳、重厚さは存続している。「こんな漢字も知らないで、本当に大学生なのか。」「ずいぶん難しい字を知っていて学がある。」などと価値づけることは、日常茶飯事である。

また、近年の学界では、漢字一字に音読みと訓読みのあることが、漢語の理解を助けている、との主張がさかんである¹⁾。その影響もあって、漢字が重要視される傾向にある。

1. 2. 文字使用の現状

われわれが実際に目にする文章を検討すると、使用している文字の種類は予想以上に豊富であることがわかる。これを樺島忠夫(1979)は、「にぎやかな文章」と呼んでいる²⁾。次の例は、毎日の生活に深い関わりのある言語資料体としての、新聞からの引用である。ここでは、漢字、平かな、片かな、ローマ字、アラビア数字、そして記号をみることができる。

……五十年実績は、対G N P（国民総生産）比が〇・三二%（三十三億ドル）で、国際目標〇・七%には遠く及ばず、痛いところを突かれた形となっている。（『読売新聞』1981年6月8日 朝刊 第1面）

また、文字の適用についても、規範意識とくいちがった面がみられる。次の例も1981年の新聞からとったが、下線部の片かな表記は、前述した特殊な語ではない。括弧内に示す漢字を、あてることができるはずである³⁾。

何と、五千億円のカネが浮いてくるのである。（「金」『読売新聞』
6月8日 朝刊 第1面）

-
1. 森岡健二 「漢字の層別」上智大学文学部紀要分冊『国語学論集』第7号 1973年
鈴木孝夫 「漢語は外来語か」『月刊言語』Vol. 7, No. 2. 1978年
 2. 樺島忠夫 『日本の文字——表記体系を考える——』岩波書店 1979年
 3. 片かな表記については、以下の文献に、実証的な考察がみられる。
土屋信一 「現代新聞の片仮名表記」国立国語研究所報告59『電子計算機による国語研究VIII』 秀英出版 1976年
佐竹秀雄 「若者雑誌のことば」『言語生活』No. 343 1980年
野村雅昭 「週刊誌のカタカナ表記語」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』 大修館書店 1981年

生まれながらにしてテレビありきの若い人々を“ガイジン”と心得なくてはなりません。（「外人」 『毎日新聞』 5月9日 朝刊 第5面）

このように、現実の文字使用は、その種類も適用も多彩なのである。

2. 漢字の表意性

漢字は重要視されている反面、片かなに代行されているというのが現実である。その原因は、漢字の表意性が退行したことにあり、筆者は推論する⁴。

漢字は表意文字であり、一字一字に意味があるという。しかし、その「意味」とは、中国語でのことなのか、日本語でのことをさすのか、明確ではない。また、起源までさかのぼるのか、現代の用法を対象とするのかも、明言されない。

筆者は、漢字の表意性を、言語の側面と人間の側面からとらえ、二通りに定義する。この2つの定義は、同一のことがらを、それぞれ半面からみたものであり、両者は表裏関係にある⁵。

(1) 現代日本語に規範として備わっている、漢字一字の意味

(2) 現代日本人の意識に共通して定着している、漢字一字の意味

したがって、筆者のいう「意味」は、語源とは異なることもあるし、比喩や

4. 宮島達夫は、漢語を構成する個々の漢字の意味が薄れているので、「ジドーシャ」「ヒコーキ」と書いても良いくらいである、と述べている。「語彙の体系」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語9 語彙と意味』岩波書店 1977年

5. 林四郎は、語をささえる漢字の意味として、「基底語」「基底意味」を考える。「漢字基底語考」筑波大学文芸・言語学系紀要『文芸言語研究・言語篇』第5号 1981年

特殊な用法までは含まない。本義、意味の中心となるものを、さしている。

漢字の表意性と、漢字を代行する片かな表記の関係は、以下のように考える。

- (1) 漢字使用者の意識として、漢字の表意性が退行する。その結果、文字から意味が分離し、残った音と文字の結びつきが緊密になる。
- (2) 上記の状態が実現し、音を表すことが文字の役割になると、漢字よりも画数の少ない、かなのほうが、書く上では便利になる。
- (3) 助詞や助動詞などを平がなで表す用法は、(1)の状態が実現した後も変わらない。この場合には、従来、漢字が表していた実質的な部分を、片かなで表記すると、わかち書き効果があり、平がなで表記した場合よりも判読性が高い。ゆえに、漢字を代行する文字として、片かなを採用する。

3. 漢字を代行する片かな表記

3. 1. 分析の目的と方法

第2節の終りに掲げた、漢字を代行する片かな表記の生成過程を実証し、漢字の表意性が退行していることを証明することが、この分析の目的である。

分析の対象とする話を収集するために、次の資料を使用した。

朝日新聞	6月18日	朝刊
毎日新聞	5月9日	朝刊
毎日新聞	6月8日	朝刊
読売新聞	6月8日	朝刊
サンケイ新聞	6月27日	朝刊
神奈川新聞	5月29日	朝刊
朝日ビジネス	5月9日	
週刊新潮	7月23日	新潮社
週刊文春	4月9日	文芸春秋

週刊現代	7月30日	講談社
croissant (クロワッサン)	4月25日	平凡出版
croissant	6月25日	平凡出版
COSMOPOLITAN (コスモポリタン)	7月	集英社
MEN'S CLUB (メンズクラブ)	2月	婦人画報社
PLAYBOY (プレイボーイ)	8月	集英社

以上の13種15誌を全数調査して、漢字を代行する片かな表記を拾い、計1,012語を得た。一度とった語は二度目から捨てているので、これは異なり語数である。ただし、辞書で同一項目下に説明のある語でも、家具を表すイスと地位を表すイスのように、明らかに意味の違う場合は、両方拾っている。

語の選定にあたっては、もともと漢字のない片かな語を除外した。ただし、現代において、片かな表記が普通となっている外来語のうち、「煙草」^{タバコ}、「倶楽部」^{クラブ}など、漢字が考えられるものは、分析の対象とした。漢字があてられるか否かの判定には、『学研国語大辞典』を用いた。固有名詞の片かな表記は、漢字で表すことが可能であっても、分析の対象から除外した。固有名詞の表記を変えると、指示物が異なることも考えられるからである。

このように選定した1,012語の1つ1つについて、書き手が片かな表記を使った理由を、日本語使用者としての筆者の直観で判定し、分類した。片かな表記の理由は、一語についていくつか考えられることが多く、画然と類別することは困難である。しかし、最も大きな理由と思われる項に、ふりわけていった。

3. 2. 分析の結果と考察

分類と、それぞれに属する異なり語数は、次のとおりである。

A. 漢字と意味が分離しているもの

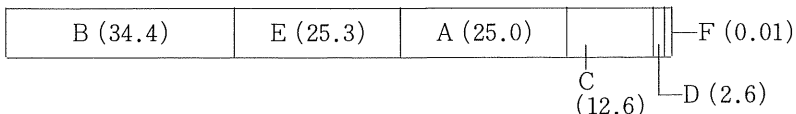
1. 一字のになう意味が不明瞭なもの
 - a. 語全体が不明瞭なもの……………16
 - b. 語の一部が不明瞭なもの……………51
2. 一字のになう意味が明瞭なもの

a. 語構成や漢字の適用がまったく不明瞭なもの……………	54
b. 語構成や漢字の適用が一部不明瞭なもの……………	16
c. 語構成や漢字の適用は明瞭であるが、漢字が意味の理解を常に ささえているわけではないもの……………	86
3. あて字……………	14
4. 造語・略語……………	7
5. 固有名詞……………	9
B. 漢字の種類によるもの	
1. 当用漢字表表外漢字	
a. 送りがな問題のあるもの……………	51
b. 送りがな問題のないもの……………	213
2. 当用漢字表表外音訓	
a. 送りがな問題のあるもの……………	18
b. 送りがな問題のないもの……………	20
3. 表記にユレがあるもの	
a. 送りがな問題のあるもの……………	2
b. 送りがな問題のないもの……………	4
4. 画数の多いもの（1、2は除外）	
a. 送りがな問題のあるもの……………	8
b. 送りがな問題のないもの……………	32
C. 発音どおりに表すもの	
1. 外国人が話しているもの……………	2
2. 話しことば調のもの	
a. 音韻の変化したもの……………	6
b. 短音化したもの……………	8
c. 長音化したもの……………	4
d. 促音化したもの……………	1
e. 撥音化したもの……………	4
f. 長音符号を使ったもの……………	16

3. 誤読されることを防ぐもの	
a. 漢字レベルで誤読のおそれがあるもの	41
b. 文脈を与えても誤読のおそれがあるもの	14
c. 熟字訓	14
d. 表外音訓で熟字訓に近いもの	14
4. 誤読された例を示すもの	1
D. 品詞によるもの	
1. 代名詞	3
2. 副詞	
a. 擬声語・擬態語に近いもの	6
b. 名詞になりうるもの	3
3. 感動詞・連語	13
4. 敬称	1
E. 意味に特別な効果をもたせるもの	
1. 比喻、本義の周辺にあるもの	212
2. 特殊なニュアンスをもたせるもの	17
3. 強調を表すもの	25
F. 表記上きわだたせるもの	7

以上を6群にまとめると、各群に属する語数と、その占有率(%)は次のようになる。

A. 漢字と意味が分離しているもの	253
B. 漢字の種類によるもの	348
C. 発音どおりに表すもの	122
D. 品詞によるもの	26
E. 意味に特別な効果をもたせるもの	256
F. 表記上きわだたせるもの	7



6群のうちで、筆者の仮説を証明するものはA群である。A群に分類した語例を以下に記載し、検討する。なお、分類の判定に必要な、文全体の意味や表記をみることができるよう、語の前後をとって掲げる。括弧内は、それぞれの語にあてうる漢字と出典である。

1. 一字のなう意味が不明瞭なもの

漢字を1つだけとりだしてみたときに、その字自体の意味がよくわからないものである。

a. 語全体が不明瞭なもの

語構成要素となる字が、どれも意味のわからないものである。

三頭分の馬子屋のボロの掃除も楽じゃない。（「襤褸」 『毎日新聞』）
そこへ藤田監督と王助監督がアイサツに。（「挨拶」 『週刊新潮』）
一生アクセク働いて、家のためのローンにばかり吸いとられるのがオチでは、たまりません。（「齷齪」「齷齪」「催促」
『COSMOPOLITAN』）

b. 語の一部が不明瞭なもの

語構成要素となる字に、意味のわかる字を含む語である。

イスやガラス、落ちて来た荷物に当たるなどして（「椅子」 『読売新聞』）

ハツラツたる国会報告。（「潑刺」「潑刺」 『週刊現代』）

体力とエネルギーを持っていないくはダメなのだ。（「駄目」

『COSMOPOLITAN』）

「椅子」の「子」は、「こども」の意味がすぐに浮かぶ。これは、「椅子」という語の意味には直接結びつかないが、一字の意味としては確立している。一方、「椅」は何を表しているのか、まったくわからない。

「駄目」の「駄」は、「駄作」「駄菓子」「駄洒落」などの語も考えあわせると、「上等ではない」という意味が想定できる。しかし、「無駄」にいたっては、「駄が無い」→「上等でないものがない」と解釈すると、「効果や利益のないこと」とは逆になってしまう。そこで、やはり「駄」の意味はと

らえられないと判断した。

2. 一字のになう意味が明瞭なもの

漢字一字の意味は確立しているが、ある語を表すときの適用方法がわからない場合である。つまり、語義と字義のつながりが認められないものである。

a. 語構成や漢字の適用がまったく不明瞭なもの

あんみつ、みつ豆に使用するカンテン（「寒天」 『毎日新聞』）

「丸山ワクチンは、クスリでなく宗教だ」といわれるユエンだが（「所以」 『週刊新潮』）

ヤカンとしての機能が十分に発揮されている。（「薬罐」 『croissant』）

「所以」は漢文からきたものである。現代では、漢文の素養のある人が減ってきているので、なぜ「所」と「以」を書くのか、理解できないのが実状ではないか、と判断した。

「薬罐」は、昔、薬を煎じるのに使った。その意味では、漢字の適用が明瞭である。現代人が、漢字からこの語源を想起することはできる。しかし、それは、一歩まちがえば語源俗解となる危険性をもっており、正しい語源を想起するのは偶然でしかない。ゆえに、適用がまったく不明瞭であると、判定した。

b. 語構成や漢字の適用が一部不明瞭なもの

ハガキにご希望の品名を書きお申し込みください。（「葉書」 『毎日新聞』）

合コトバは、「金をかけるな」だそうだ。（「言葉」 『週刊新潮』）

そんなのウソツパチだと思うな。（「嘘っ八」 『croissant』）

c. 語構成や漢字の適用は明瞭であるが、漢字が意味の理解を常にささえているわけではないもの

ハガキかデンワで左記へ（「電話」 『読売新聞』 広告）

そんなに参ったところなんかミジンもない。（「微塵」 『週刊現代』）

ホンモノ志向が強い（「本物」 『MEN'S CLUB』）

3. あて字

A群は、漢字と意味が分離しているわけであるから、その点では、すべて、あて字であるとも考えることもできる。しかし、辞書で「あて字」としている語は、漢字と意味の分離が著しいものとして、1類もうけた。使用辞書は、『学研国語大辞典』と『新潮国語辞典』である。

うれしいヤジと拍手を浴び（「野次」「弥次」 『神奈川新聞』）
ウヤムヤのうちに葬り去られていたかも知れない（「有耶無耶」
『週刊文春』）
いかにもガラクタ市といった風情のマーケット（「瓦落多」
『COSMOPOLITAN』）

4. 造語・略語

漢字ごとの意味を知っていても、何が省略されているのか、あるいは、何を象徴しているのかわからなければ、語の意味を理解できない場合である。

④超えたら、ワリコー（「割興」<「割引興業債券」 『毎日新聞』
広告）
クロヨンといわれる税の捕捉率の差もそのひとつ。（「九・六・四」
『週刊新潮』）
サウンドを聴いてみると確かに甘く懐かしいナツメロ風（「懐メロ」
<「懐かしのメロディー」 『COSMOPOLITAN』）

5. 固有名詞

語表記の成立時には、何らかの意味をになって漢字をあてたのかもしれないが、今となっては、個々の漢字の意味が感じられない場合である。

私学の雄といわれるワセダ（「早稲田」 『毎日新聞』）
ご用命はお近くのタカシマヤで（「高島屋」 『朝日新聞』）
スキヤ橋のソニービル（「数寄屋」 『PLAYBOY』）

4. 結 論

以上、現代日本語における漢字の地位と、その表意性について考察した。表意性に関しては、漢字を代行する片かなの用法に、その退行がみられるのではないかと、との仮説のもとに、分析を試みた。分析の結果、漢字が片かなに代行される要因は、次のような条件にあると、まとめることができる。

- (1) 漢字の表意性
- (2) 漢字の種類
- (3) 発音
- (4) 品詞
- (5) 意味
- (6) 読みやすさ

筆者の仮説は(1)で証明された。しかし、漢字を代行する片かなの用法には、(2)から(6)の要因がみられることも、わかった。

この分析は、方法上、次の点が今後の課題として問題になる。

- (1) 文章の段階での要因（ジャンル、使用目的、使用場面など）を追究する
- (2) 要因を整理し、組織的な体系をたてる
- (3) 要因相互の関連を検討し、要因のはたらく順序を解明する

また、分析の対象としては、次の点を考慮にいれなければならない。

- (1) 漢字が平かなによって代行される場合を考察する
- (2) 任意の語の表記が、漢字、平かな、片かな、と変容する場合について、それぞれの頻度と用法を対照し、変容の要因を考察する

漢字の表意性については、退行している側面の追究だけでなく、ぎゃくに、ますます機能を増強している側面の可能性についても、検討しなければならない。

このように、漢字の表意性には、残された問題が山積している。本論で、表意性の退行を完全に証明できたとは思わない。しかし、言語現象から実証を試みることによって、退行の一側面を明らかにし、現代日本語において、

漢字は表意文字としての機能を効果的に発揮してはいるのではないか、という問題提起を行ったといえよう。

《参考文献》

- 文化庁文化庁国語課編 『公文書の書き表わし方の基準（資料集）増補・改定版』 大蔵省印刷局 1977年
- 林四郎 「基底語考」筑波大学文芸・言語学系紀要『文芸言語研究・言語篇』第5号 1981年
- 樺島忠夫 『日本の文字——表記体系を考える——』 岩波書店 1979年
- 宮島達夫 「語彙の体系」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語9 語彙と意味』 岩波書店 1977年
- 森岡健二 「漢字の層別」上智大学文学部紀要分冊『国語学論集』第7号 1973年
- 野村雅昭 「週刊誌のカタカナ表記語」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 1981年
- 佐竹秀雄 「若者雑誌のことば」『言語生活』No. 343 1980年
- 鈴木孝夫 「漢語は外来語か」『月刊言語』Vol. 7 No. 2 1978年
- 武部良明 『日本語の表記』 角川書店 1979年
- 土屋信一 「現代新聞の片仮名表記」国立国語研究所報告59『電子計算機による国語研究Ⅷ』 秀英出版 1976年

Do the Chinese Characters in Modern Japanese Still Function as Ideographs?

YOSHIMURA Yumiko

The purpose of this paper is to examine and discuss the decay of the ideographic functions of Chinese characters in modern Japanese.

The Japanese people are prescriptively conscious that written Japanese consists of *kanji* (Chinese characters in modern Japanese) and *hiragana* (Japanese cursive syllabary), and the former is much more crucial. The common use, however, reveals that the elements of written Japanese are *katakana* (Japanese square syllabary), Roman letters, numerals, and symbols as well as *kanji* and *hiragana*; and *katakana* sometimes replaces *kanji*.

The analysis of 1012 words written in *katakana* which act for *kanji* attempts to verify the hypothesis that the decay of the ideographic functions of *kanji* leads *kanji* to be replaced by *katakana*. The results indicate that the hypothesis is proved to be true in some cases, and also there are other cases where the factors of *katakana*'s replacement lie in the graphic, phonetic, grammatical, semantic, and readable conditions.

This paper comes to the conclusion that *kanji* in the modern Japanese language does not always discharge the ideographic functions effectively.